



現代社会とメンタルヘルス  
ー包摂と排除ー

中谷 陽二 責任編集  
 斎藤 環, 森田 展彰,  
 小西 聖子 編集  
 小池 純子, 菊池 春樹,  
 渡邊 敦子, 大江 由香,  
 種田 綾乃, 池田 朋広  
 編集協力  
 星和書店  
 2020年10月 372頁  
 本体価格 3,600円+税

昨今の新型コロナウイルス感染症がさまざまに精神的な影響を及ぼすなかで、我が国における社会のなかで孤立の問題への悪影響が懸念されている。本感染症により現代社会の心の健康面での課題の一端が浮き彫りになっている状況であるが、本書においてはそのような困難な状況に直面する我々にメンタルヘルスの立場から一つの示唆を与える側面があるのではないかとと思われる。

本書では現代社会のメンタルヘルスに関して孤立・トラウマ・依存症・家庭の問題・犯罪の問題に焦点を当てつつ、第1章 社会へのメッセージとしての孤立、第2章 トラウマ・被害者、第3章 社会現象としての依存症、第4章 家庭内葛藤、第5章 現代社会の生きにくさと犯罪、という5章に章立てされている。精神疾患（メンタルヘルス）における社会的要因が関与する主題を扱うなかで、さまざまに課題を抱える多様な対象者への支援における具体例と課題、対応事例、考え方を論じているが、排除と包摂というキーワードで現在社会のメンタルヘルスの問題を考察している。

排除と包摂にはさまざまな次元があり、それらは経済的な次元、社会的な次元、政治的な次元、文化的な次元などである。このうち、メンタルヘルスと大きく関わるのは社会的な次元であるが、社会的な排除が「社会のなかでの孤立、社会的要因による孤立」をもたらし、社会の成熟度と個人の成熟度は反比例するため (p.10)、社会の文明化が進展していくなかでの孤立は精神疾患のリスクのみならず自殺のリスクを高めることになる。包摂の概念で示された

個々人を包み込む社会が望ましいとされ、19世紀末にエミール・デュルケーム (Emile Durkheim) は『自殺論』のなかで自殺の回避についての考察として集団に帰属することの重要性を述べている。このように社会的排除については「排除から包摂」という方向性が望ましいことがさまざまな報告から示されているが、その一方で今日においても思うようにはならない現実がある。

「排除から包摂」というアプローチは精神科医療がめざすべきものでもある。本書によると精神医学史において3段階の「排除」形式：①価値判断、②医療化、③福祉化があると述べているが (p.344)、その指摘は精神科医療そのものが当事者への医療（支援）において本来は包摂を図りつつ排除を内包する可能性を示しているとのことである。つまり、精神医学において排除と包摂を二項対立的に位置づけて理解するのではなく、排除と包摂は相互に浸透しており、どちらも相互に排他的な性質を有してはいないという解釈は大切な点である。例えば「ひきこもり」においてめざすべきは「ひきこもることが普通の社会」(p.11)であり、「包摂とは排除しないことではなく、排除を前提に包摂を議論する」(p.247) ことが必要であるという議論に繋がる。そのなかで精神医学の領域においてジョック・ヤング (Jock Young) による「新しい包摂主義」の可能性を援用し、多様性の尊重および異質なものと両立するノーマライゼーションのあり方を模索すべきという論点が紹介されている。

本書を通じて、精神科における通常診療やこころのケアにおける支援活動に取り組む上で、「包摂」と「排除」の問題を意識する重要性を改めて認識した。OECD加盟国における家族以外とほとんど交流のない「社会的孤立」の割合が日本で最も高いという報告があるが、新型コロナウイルス感染症で感染予防のキーワードになっている「ソーシャルディスタンス」がともすればこの状況を悪化させないか懸念されている。まさに現代社会において「ソーシャルエクスクルージョン (社会的排除)」を生まないように、むしろ「ソーシャルインクルージョン (社会的包摂)」をめざす意志を確かにもつことが大切であると感じている。

(谷井久志)